

|||||
 巡 検
 |||||

スパ・リゾート・ハワイアンズ

内 田 忠 賢

9月上旬、ぼくは旧「常磐ハワイアンセンター」、現在のスパ・リゾート・ハワイアンズを訪ねて、内藤教授・葉助手・3年生と一緒に福島県まで行った。けっこう田舎（スイマセン）だから「娯楽の殿堂」っぽいヘルスセンターを予想していたが、意外にも若者受けもネラっていそうな大“リゾート”だった。日焼けサロンだってある。関西で言えば「カラカラテルメ」を大きくしてホテルを併設した感じだ。ハワイアンズはヘルスセンターとして1965年開業、1991年に大規模なリニューアルと名称変更を行って現在に至っている。最初は本当に「常磐」の“ヘルスセンター”だった。この事情は、涙なくしては語れない。

かつて、この場所は常磐炭田の炭鉱のひとつだった。1950年頃までは繁栄を極めていた。命懸けの仕事だから炭鉱労働者の給料は、サラリーマンの3～5倍はあったという。炭鉱町には映画館・芝居小屋なんか軒を連ね、それは活気があった。ところが高度経済成長期のエネルギー革命である。石炭なんて効率の悪い資源は見捨てられ、石油がエネルギー源の王者となる。この常磐、次いで筑豊・宇部、そして北海道と閉山が続く。そこで炭鉱離職者の失業対策と炭田地域の生活維持が問題となる。国会では1961年、時限立法「産炭地域振興臨時措置法」が成立。でも、その恩恵は元坑夫の家族ひとりひとりまで行き渡らない。「手に職」を生かそうと、多くの坑夫はまだ操業をしていた筑豊や夕張に流れていった。だが、この場所から離れたくない人々は、苦難の道を歩むことになる。ハワイアンズの売店部部長の鈴木郷太郎さんは当時の様子をしみじみと語った。「私自身は炭鉱の管理部門にいたのですが、仲間の転

職をどうするか途方に暮れました。これから、どうやって生きていこうかと、みんなで毎晩、話し合ったものです。」

悩んだ末、仲間の間にアイデアが次々と浮かんだ。地下深く鉱道を掘る炭田では、地熱で熱せられた大量の水が出る。その温水を生かして、温泉を開業できないか。芝居や映画は人一倍見ていたから、劇場を始めてはどうか。派手に飲み食いすることには精通している、宴会場ならできるぞ。どうせやるなら、憧れのハワイのイメージで……。そこでヘルスセンター「常磐ハワイアンセンター」の開業である。炭鉱勤めの男たちが人一倍笑顔をふりまき、妻や娘は腰蓑を着けて舞台上で一生懸命踊った。トロッコの運転手は送迎バスの担当だ。スタッフ全部が離職者とその家族なのだ。最初、客の入りは悪かった。炭鉱の人間は怖い、と麓では噂されていたからだ。気は荒いし、金遣は派手、そして、どこの馬の骨とも判らぬ他所者ばかり。だが、やがて少しずつ理解されて……。

こんな事情でハワイアンズは始まった。体育館のようなドームの中の大プールはカルキ臭くて、しかも温水だからムットとする。お化け屋敷も情けないほどピンボウくさい。残念ながらリニューアルしても垢抜けていない。ぼくの故郷にある長島温泉にも遠く及ばない。だけど、律儀そうに掃除をするオジサンや額に汗しながら焼きソバを作るオバサンを見ていると、苦労話を知っているだけに応援したくなる。

がんばれ、スパ・リゾート・ハワイアンズ！

(注)『月刊・娯楽の殿堂』第3号(1994年10月)より転載(一部修正)